

# 北九州市立大学文学部紀要

(人間関係学科)

第 25 卷

## 目 次

野口 博子

ニューカマー女性のエンパワーメントと地域日本語教室の役割 . . . . . 69

---

北九州市立大学文学部

2018年3月発行

## ニューカマー女性のエンパワーメントと 地域日本語教室の役割

野口博子<sup>1\*</sup>。児玉弥生

キーワード：ニューカマー，エンパワーメント，地域日本語教室

### 序章 課題設定

近年、経済活動をはじめ各分野で国際化が進展し、特に情報通信などの発達による人の国際移動はますます増加してきている。日本は政策上、外国人「単純労働者」を受け入れていないが、実際には多くの外国人「単純労働者」が働いている（明石2011）。

国際連合広報センターは、移民について次のように述べている。「国際移民の正式な法的定義はないが、多くの専門家は、移住の理由や法的地位に関係なく、定住国を変更した人々を国際移民とみなすことに同意している。3カ月から12カ月間の移動を短期的または一時的移住、1年以上にわたる居住国の変更を長期的または恒久移住と呼んで区別するのが一般的である。」

移民か外国人労働者かの区別は、移住者自身の入国の目的の違いや、彼らを受け入れる国の姿勢にもよる。移民になることを前提としているアメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドは伝統的な移民受け入れ国であるが、移民を認めないドイツやスイスは「ゲスト・アルバイター（客員労働者）」という呼称を使う。移民を認めない日本の場合もドイツやスイスのケースに近く、「定住外国人」と区別する存在とし「外国人労働者」という呼称を使っている（富岡1999）。

日本は明治初期から1960年代まで、第二次世界大戦中とその後の約15年間を除いて、ハワイ、南北アメリカ大陸、中国大陸などへ移民を送りだしてきた。一方、1990年以降、出入国管理及び難民認定法（入管法）の改定により、中国、東南アジア及び南米各国からの日本人移民の子孫の流入が飛躍的に増えた（田中 2011）。

日本への上陸を許可された外国人は、活動又は在留することのできる身分や地位が定められており、その活動の身分・地位の内容が「在留資格」である。2016年末現在、日本における外国人登録者数は2,382,822人で、総人口1億2691万8千の1.8%を占めている（法務省2016）。

本研究のフィールドA県にも多くの外国人が居住するようになった。A県の2016年末現在の外国人登録者数は64,998人（前年末60,417人）で、前年末に比べ、4,581人増加し、A県の人口に占める割合は1.3%である。在留資格は、特別永住者<sup>(1)</sup>12,508人、永住者<sup>(2)</sup>12,454人、留学16,739人、技能実習生<sup>(3)</sup>6,655人、定住者<sup>(4)</sup>1,313人、その他15,329人であり、国籍は多い順から中国、韓国、ベトナム、ネパール、フィリピンである（法務省2016）。A県には旧産炭地があったため、戦前から炭鉱の労働者として居住しているオールドカマー<sup>(5)</sup>と呼ばれる韓国等の特別永住者も多い。また、地理



的にアジアに近いこともあり、中国をはじめとするアジアからの技能実習性が多くなっている。

1996年筆者は有志とともに、地域の外国人を支援するために日本語指導や生活の支援を主な活動とするボランティアグループを立ち上げた。現在日本語教室には、留学生及びその配偶者、国際結婚による外国人配偶者、日系人、研究者、英語教師、技能実習生などが参加している。この20年余の活動の中で、日本語教室に参加しているニューカマー<sup>(6)</sup>の女性からの様々な相談に対応してきたが、特に既婚女性からの相談が多い。なかでも言葉や文化の違いから生ずる出産や育児に関わる問題が際立つ。そのため、日本語学習支援以外に様々な生活上の支援を行っている。たとえば予防接種が日本と異なり戸惑う女性と保健師との間に入り説明したり、幼稚園や保育園等の入学手続きがわからず困っている女性には、代わりに書類作成をしたり、出産に立ち合ったこともある。対応する支援内容も多岐に渡っている。日本語が少しずつ話せるようになると、アルバイトの相談などもあり、面接に同行したこともある。

このように来日時には日本語が全くわからず言葉や文化の違いから起こる様々な問題に遭遇しやもう得ず帰国してしまう女性もいるなかで、困難を乗り越え、育児と仕事を両立しながらイキイキと自分の居場所を見つけ活躍しているニューカマー既婚女性たちがいる。一方で、なかなかエンパワメント獲得が困難な事例もある。筆者（野口）が主宰する日本語教室は外国人散在地域にあり、集住地域とは異なる課題もある。

本研究は、地域日本語教室において学習するニューカマーのうち、主として既婚女性に注目してエンパワメント獲得の過程とそこに関わる地域日本語教室の役割について考察する。

はじめに外国人散在地域の地域日本語教室の支援活動について概要を述べる。続いて、地域日本語教室に来るニューカマー既婚女性のエンパワメントにおける課題について述べる。さらに地域日本語教室に来ていたニューカマー既婚女性の中で、ふたつの事例に注目して来日後の育児と仕事を両立させたエンパワメント獲得のプロセスと、そのプロセスにおいて遭遇するさまざまな困難とその困難に対処するなかでどのような能力が開花され、作り出されてきたのかをライフヒストリー調査をもとに分析する。最後に、散在地域の地域日本語教室の役割と課題について考察する。

女性移民労働者の先行研究では、静岡県、群馬県、愛知県など日系南米人集住地域での日系ブラジル人やその子ども等に着目した研究は数多くあるが、女性の活躍に焦点をあてた事例は数少ない。また、「興行」という在留資格で、ナイトクラブ等で接客業に就くフィリピン人女性の研究（伊豫 2013）も数は少ないが事例が発表されている。しかし、散在地域のニューカマー既婚女性が困難を乗り越えエンパワメントを獲得している研究の蓄積は極めて少ない。本研究で、散在地域でのニューカマー既婚女性の抱える困難とともに、エンパワメント獲得のプロセスをライフヒストリー法により明らかにすることは、今後益々増加傾向にあるニューカマー女性の示唆になりえると考え

---

<sup>1</sup>\* 北九州市立大学大学院社会システム研究科大学院生  
Graduate School student of Social System Studies, Kitakyushu University

## 第1章 地域日本語教室における支援活動

### 1. 地域日本語教室設立の経緯

#### (1) 活動の経緯

A市に大学が設立され、留学生やその家族が多く居住するようになった。当時A市には外国人の生活の支援等を行う場所はなかったため1996年に有志でボランティアグループを立ち上げた。活動を始めた頃は、何をすればよいのか、全く手探りという状況であった。そこで、留学生やその家族にどのような支援が必要なのかを調べ、国別に担当を決め、連絡を取り合いながら必要な支援を行った。例えば、病院への同行、買い物支援、引越しの手伝い、子供の教育相談、小学校入学や幼稚園入園手続き、通訳、翻訳等である。

また、A市には当時彼らに日本語を教える機関はなかったため（大学でも授業はなかった）日本語教室を開講し、公民館で毎週土曜日の午後に講座を行った。

2002年11月～ 2003年3月及び2003年10月～ 2004年3月まで地域貢献特別支援事業・国際交流支援として当ボランティア団体の日本語講座が採用された。

#### (2) ボランティアスタッフの参加状況

立ち上げ当初のボランティアスタッフは5名で、各人それぞれ個人的に外国人と関わっていた人達である。活動から4年目で筆者（野口）を除く立ち上げメンバーの4名全員が家庭の事情等でボランティアを辞めることになった。その後、多くのボランティアの入れ代わりがあり、現在では筆者を含め4名のボランティアスタッフで日本語教室を運営している。筆者を含む3名は有職者であるので、仕事の都合で教室開催日に参加できないこともあり、ボランティアスタッフのみで教室を維持していくのに苦労も多い。

また、A市では国際交流事業として中高生が海外派遣を行っており、この事業に参加した中高生が事後の国際交流の場ということで、2010年より日本語教室に参加している。中高生の主な活動は日本語学習者の子どもたちのお世話であるが、子どもの参加がないときには、授業に入ってロールプレイ等を手伝ってもらっている。しかし、中高生は試験やクラブ活動等で、突然欠席することも多く、事前に準備した教材をうまく活用できない場合も多い。

日本語教室に参加している中高生たちは、徐々に英語や他の言語に興味を持つようになる。そして、これまで恥ずかしがって外国人とあまり話さなかったものが、語学習得に意欲が湧き、大学に進学する際、留学のチャンスのある大学を志望したり、将来の職業を日本語教師と決め、大学で日本語を専攻する人もいる。日本語教室は外国人の日本語習得のみならず、中高生の国際交流としても有意義な活動の場となっている。

#### (3) 学校、行政、地域住民との関わり

ボランティアグループ発足当初から小中学校からの要請により日本語学習者を講師とした国際理解講座の参加の支援をしている。また、地域の公民館祭りの模擬店の参加も支援している。

## ニューカマー女性のエンパワーメントと 地域日本語教室の役割

2006年に国際交流ボランティア団体、大学、行政との連携で国際交流推進協議会が発足され、当ボランティアグループもメンバーの一員となった。筆者は発足当初から副会長として活動しており、協議会主催行事に日本語学習者の参加を積極的に促している。

また、地域住民との関わりとして個人の家庭での餅つきや中学校の運動会や、住民運動会等にも日本語学習者が参加し、住民との交流支援を行っている。

### (4) 日本語学習者のプロフィール

教室立ち上げ当初（1996年）の学習者は留学生とその配偶者のみであった。2年目より日本語教室の存在が口コミで広がり、日本人を配偶者とするアジアからの女性が多く参加するようになった。特にエンターテイナーで来日し、日本人と結婚したフィリピン人女性が多かった。2000年頃からアジアに生産拠点を持つ企業の幹部候補生のエンジニアが参加するようになった。その後、縫製工場の技能実習生、外国語指導助手（ALT）、日系ペルー人、大学の研究員等、様々な目的でA市やその周辺に居住している人が参加するようになった。

現在では留学生やその配偶者の割合は全体の1/4ぐらいに減少している。留学生は日本語が少し話せるようになるとアルバイトをするようになり、徐々に講座に来なくなる傾向にある。一番熱心に参加している学習者は日本人を配偶者とするニューカマー既婚女性であり、過半数を占めている。しかし、日本語教室に参加しているニューカマー既婚女性は比較的夫との関係がうまくいっているケースである。ニューカマー女性がどのような経緯で結婚に至ったかは定かではないが、仲買業者を通じて結婚した女性の中には、日本語能力が全くなく、夫とのコミュニケーションが取れず、夫からのDVでジェルトアーに避難し、ジェルトアーから日本語教室に参加していた女性もいた。しかし、精神的苦痛で長期滞在することが困難となり、最終的には、離婚し、帰国を余儀なくされた。

また、エンターテイナーで来日し、日本人と結婚した女性たちは日本語が話せるようになると、永住ビザを取得後に、離婚するケースが多かった。そのような女性たちは徐々に日本語教室には来なくなり、現状を把握することはできていない。

### (5) 学習者の活動支援

学習者の日本語学習のモチベーションを上げるために、日本語が少しずつ話せるようになった学習者へは、小中学校での国際理解講座の要請があった場合に参加してもらうように勧めている。自信がない学習者の場合には、事前に発表の内容を一緒に考えたり、練習したりして自信を持てるように指導をおこなっている。また、外国料理教室の講師をお願いしたりもしている。1年に一回開催される日本語スピーチコンテストへの出場者へはスピーチの内容を添削したり、スピーチの練習もしたりもしている。

また、地域住民との交流のために公民館祭りや地域の祭りでの模擬店に出店してもらっている。料理が得意な学習者には料理教室の講師を依頼したり、日本語能力が高くなった学習者には語学講座の講師を依頼している。学習者は様々な活動に参加することにより、より日本語学習の必要性を感じ、

日本語の勉強に意欲を燃やすようになっている。

## 2. 地域日本語教室の支援活動

### (1) 日本語学習支援

日本語教室の役割としてまず日本語学習支援である。次にボランティアスタッフとの交流、そして、相談への対応である。日本語教室への参加が長期になり、ニューカマーとボランティアスタッフの交流が深まるにつれて様々な相談ごとが多くなる。病気や出産や子育てに関する相談、帰化や在留資格に関する相談、結婚・離婚に関する相談、子供の就学や進学に関する相談、保証人相談など、日本語学習からかけはなれた相談が数多く寄せられるようになる。

こうして「日本語教室」という看板の下で、生活相談や情報提供、悩み相談の場が各地に生まれていった。ボランティアはさまざまな分野の専門家や行政機関とネットワークを構築し、ニューカマーの急増に制度や行政の対応が追いつかない点について発見して緊急対応しつつ、問題点を行政や専門家に伝え、行政や専門家が対応すべきものは引き渡していくという先駆的な役割を担ってきた。

日本語教室は公共施設の学習室や会議室を利用し、ニューカマーと支援者が1対1（マンツーマン）、あるいは2～3人の小グループを作って学習するという形態が多い。学習者の大半を占めるのは、日本語を全く知らない入門レベルだが、ややこみいった日常会話や文字学習（ひらがな・カタカナ・漢字）、身近なことをテーマに話をする。

### (2) 情報の提供

ニューカマー外国人にとって、散在地域に暮らすことは身近な生活上の情報を得ることは難しい。そのため必要な情報の提供を行っている。

### (3) 外国人ネットワーク構築の支援

家から出たことのなかった外国人が日本語教室に参加することで、同国や他国の外国人と繋がり、情報交換することが、できる。また、同国人の友人ができることで、母語を話すことができ、ストレスを緩和することができる。

### (4) 精神的な支援

精神的なストレス等があるときには、物理的な支援はできなくても聞いてくれる人がいることで安心感を得られる。また、自分を認めてくれる人の存在がいることも外国人にとって支えになる。自分がやっている仕事や技術の取得等をしたときに聞いてくれる人がいることでモチベーションが高くなり、頑張ることができる。

## 第2章 ニューカマー女性のエンパワーメント

エンパワーメントはエンパワメントとも言われるが、英語の「empowerment」を語源とし、自らの内在する力に依拠し、その力を全面的に発揮できるような環境や他者との関係をつくり上げていることであり、そうした自らの可能性の全面的発揮を疎外するものをひとつひとつ取り除いている作業も、このエンパワーメントの一つのプロセスと考えられる（田中2011）。

エンパワーメントという言葉は、1995年の第4回世界女性会議のキーワードになり、それ以降ひろく使われるようになった。もともとは、人種、民族、ジェンダーなどによる社会的差別によって意思決定過程から排除されている人々が、自らが社会的、経済的、政治的な力を増し、意思決定過程に参加し、連帯していくことを意味していたが、今日では、もう少し一般的に一人ひとりが社会的、経済的、政治的に力をつけることを意味して使われている（大槻2016）。

太田（2011）は、エンパワーメントとは「社会的な弱者が、自分自身あるいは他者の援助によって、自信と尊厳の回復、能力の取得を行い、他人からのコントロールから解放され、自分の意志決定を行えるように社会の関係性を改革していく身体的、心理的、社会的、経済的、政治的パワーなどを獲得しているプロセス」と定義している。

ジョン・フリードマンはエンパワーメントとは、「力をつけること」と「力を獲得すること」であると述べている。彼の論じるエンパワーメントとは、経済成長や企業の発展とは異なるオルタナティブな開発（もう一つの開発）のために人々が力を発揮することであり、①社会的な力②政治的な力③心理的な力をあげた。フリードマンが「力」を重視するのは、貧しい人々の真の生活向上のためには、単なる経済的な向上だけでは不十分であると考えているからである。貧しい人々は制度的、組織的に力を剥奪されてきたために貧しいのだから、その力の源になる資源へのアクセス機会を得ることにより、力、特に意思決定における自立性を獲得し、貧困からの脱出を図る、これがオルタナティブな開発であり、根本的には政治的過程だとされる（ジョン・フリードマン（1995）斎藤千宏・雨森孝悦監訳）。

近田（2005）は、エンパワーメントとは、「相対的に剥奪されている資源へのアクセスの増加」であると結論づけている。各資源へのアクセスは「気づき」に誘発される形で増加する。そして、この「気づき」の誘発による異なるパワーの相互作用的獲得は、社会的・経済的・心理的・政治的という形態の異なるエンパワーメントの相乗的実現を意味している。また、個人が「社会組織」や「社会ネットワーク」、さらに「政治」や「外部エージェント」などの外部者との接点を多くもっていることから、エンパワーメントの実現には外部者の支援が非常に重要である、と述べている（近田2005）。

佐藤（2005）は多くの事例を比較検討した結果、エンパワーメントに不可欠な3要素を次のように提示している。①当事者の「気づき、主体的意欲」（心理的变化）が、エンパワーメント達成過程において大きな役割を果たすことを指摘している。②外部者（ドナー、政策当局者）の機会付与（訓練・教育や資金などのサービス提供）によって、当事者が「能力開発/能力開花」を経験することが、エンパワーメントのための中核的な活動であることを指摘している。③さらに、こうして「得られた/付与された」能力は、社会的制約があるためにそれだけでは十分に機能するとは限らないので、外部者

はこの能力を発揮しやすいような社会環境づくりを働きかけるべきである、という立場に立っている(佐藤2005)。

以上のようにエンパワーメントの定義は確立しているわけではないが、本研究においては、エンパワーメント達成にはニューカマー既婚女性個人の心理的变化が重要だと考えられるので、フリードマンのモデルで「世帯(経済)」としている分析単位を、個人とした近田(2005)のモデルに準拠した新たなモデル[図1]作成した。また、近田や佐藤はエンパワーメント実現には外部者の支援が非常に重要であると述べており、個人が多く持っている「社会組織」や「社会ネットワーク」の関係についても明らかにする。

本モデル[図1]は社会的・経済的・心理的な力の場の中心に個人を置いている。この基盤となっているのが、円の外側にある8つの資源(社会ネットワーク・適正な情報・生存に費やす時間外の余剰時間・労働と生計を立てるための手段・社会組織・知識と技術・仕事・防衛可能な生活空間)である。個人がこの資源を獲得することがエンパワーメントを達成することになる。また、ニューカマー既婚女性個人の心理的エンパワーメントを可能とする資源として、自己に対する「自信」、他者に対する「信頼」、コミュニティとしての「連帯感」、自宅に対する「愛着心」の4つを設定した。ニューカマー既婚女性の最終目的である「仕事と育児」を両立するための獲得プロセスは、彼女ら個人の「自信」につながり、「自信」は日本語を習得し、仕事を獲得したことで自分の居場所(職場)でイキイキ活躍することにより生まれると考えられるため、「自信」を「仕事」と「知識と技能」の間に設定する。また、日本語習得は「社会組織」に参加することによって得られるので、日本語教室等のスタッフに対する「信頼」を生み、さらに「信頼」で結ばれた日本語教室等で親しくなったスタッフや同国や他国の学習者たちのコミュニティとしての「連帯感」を「社会ネットワーク」の横に位置づける。さらに、家を建てることは日本に永住するという意思の証である。自宅取得は日本永住を含めた自宅に対する「愛着心」が湧くので「防衛可能な生活空間」の横に設置した。また、家を建てることで地域コミュニティとの「連帯感」を高めるので、「連帯感」を「防衛可能な生活空間」の横に設置した。「適正な情報」は加入した「社会組織」で得られた水平的ネットワークの家族や友人間の「社会ネットワーク」で獲得するので、「社会ネットワーク」の横に設置した。「適正な情報」を獲得するには「生存に費やす以外の余剰時間」が必要であるので、「適正な情報」の横に「生存に費やす以外の余剰時間」に配置した。個人の生産のためには、健康の維持や生活のための生産財産等の設備(自動車等)が必要であるので、「労働と生産を立てるための手段」を「生存に費やす時間以外の余剰時間」の横に配置した。



## ニューカマー女性のエンパワメントと 地域日本語教室の役割

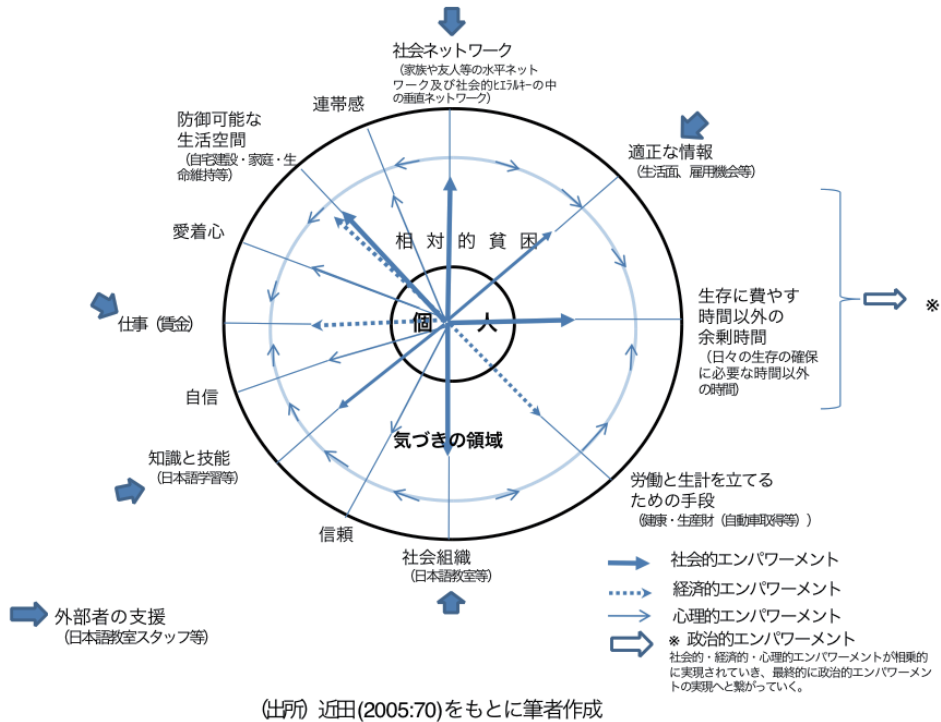


図1 散在地域在住ニューカマー既婚女性の  
【ディス】エンパワメント・モデル

## 2. 地域日本語教室にみるニューカマー既婚女性のエンパワメント獲得上の課題

外国人散在地域A市の日本語教室には、多様な目的で居住しているニューカマー既婚が多数参加している。その中でも多くを占めているのが、日本人を配偶者に持つ中国人女性である。彼女たちは母国で日本語を学習しておらず、来日時には殆ど日本語を話すことができない。また、中国人女性は子連れでの再婚が多く、年齢は30代～40代で、子どもは就学年齢に達している場合が殆どである。中国では現在激しい受験戦争が起こり、高学歴でなければ就職することも困難な状況であるという。子どものために日本在住の親戚や仲買業者の紹介で、日本人と再婚しているケースが多い。特に40代で来日した場合には、夫の経済力にも依るが、働く必要がない場合には、子どもの教育ばかりに目が

向き、自身の将来については後回しにしているように思われる。そのような女性は、日本語教室には参加しているものの日本語習得にあまり意欲は見られない。また、配偶者に経済力があまりなく就労が必要な場合には、日本語能力が低いために単純労働の職にしか就けず、仕事のために次第に日本語教室から遠ざかっていき、日本語が上達しないまま時間だけが経過している。そのような女性がたまたに教室に顔を出すこともあるが、すぐに仕事のために来なくなるといった状況を繰り返している。

日系ペルー人女性の場合には、就労のための来日が殆どである。廻りに同国人の親戚が多いため、生活上何か問題が生じた場合でも配偶者や親戚の同国人に頼ることで問題が解決する。また、職場での業務は単純労働であり、同国人が多数働いているため日本語の必要性も感じていない。兄弟や親戚の繋がりや助け合いの精神が強いために、生活上に支障をきたすことはないように見える。しかしこのことが既婚女性の日本語習得に意欲が湧かない要因のひとつと考えられる。

エンターテイナーで来日した日本人配偶者のフィリピン人女性の場合には、母国の家族の支援のために20代で来日するケースが殆どである。日本語教室で日本語を学習し、日本語が少し話せるようになると教室に来なくなる。その理由は、永住権を取得した後に子連れ離婚するケースが多く、日本語能力の向上よりも目の前の生活で精一杯という状況であるように思われる。母親が病気になるれば、公的支援を受けるしか道はない。以前日本語教室に参加していたニューカマーのフィリピン女性は、離婚後重い病にかかり、育児や生活の目途が立たず、やむを得ず母子支援生活施設で援助を受けながら生活している。また、フィリピン女性は殆どがカトリックで、情報共有の場が教会であることも多い。何か問題が生じた場合には、教会というコミュニティで知り合った同国人同士で問題に対処しているようにも思われる。最近はエンターテイナーで来日したフィリピン人女性の家族が来日し、日本語教室に参加しているケースも増えてきているが、現在のところ学習期間が短いために日本語能力はまだ低い。

外国人散在地域は、集住地域とは異なり外国人政策を地域社会で取り組むべき問題として認識されていない。特にA市には戦前から在住のオールドカマーと呼ばれる韓国・朝鮮出身の人たちやその子孫たちが多くを占めているため、地方自治体は外国人政策に力を入れる必要性を感じていないように思われる。また、多数のオールドカマーに隠れた存在のニューカマーの問題を殆ど認識しておらず、日本語教室に関わる極一部の限られた人たちだけが認識し、ボランティアで対応しているのが現状である。

今後さらにマイノリティ化する少数のニューカマーの来日も予想されるが、ニューカマー既婚女性たちが困難を乗り越え、自分の居場所を見つけ、活躍するにはどのような支援が必要であるのかが課題である。

### 第3章 ニューカマー既婚女性のエンパワーメント獲得の事例考察

#### 1. 研究の方法

##### (1) 対象者

筆者（野口）が主催するボランティアの日本語教室を通して長期に亘り関わりがあり、また育児と



## ニューカマー女性のエンパワーメントと 地域日本語教室の役割

仕事を両立させているニューカマー既婚女性を調査対象者としてA県在住の2名を選出した。滞在年数18年～25年。年齢は40代。子どもの数は2人～3人。

### (2) 調査期間

1回目は平成28年8月、2回目は平成29年3月。一人2回実施した。その後も随時追調査を数回行った。インタビューは当初一人1回1時間を予定していたが、4時間以上も及ぶものもあった。

### (3) 調査方法

ライフヒストリー調査。インタビューは基本的には日本語で行い、質問紙を準備したが、メモ程度に留めて、自由に語ってもらうことを心がけた。内容をボイスレコーダーに録音し、逐次記録も行った。また、録音する際、調査対象者に承諾を得て行った。

調査対象者への配慮として、インタビューの日時は調査対象者の都合のよい日時とし、リラックスして話してもらえるように、筆者の自宅やレストランで食事を挟んで行った。インタビューの内容は決して第三者に明らかにしないこと、論文等にインタビューの内容を使用することもあるが、必ず個人が特定できないように最大限に配慮するということを約束し、調査を開始した。

倫理的配慮として、データは本研究以外では使用しないことを説明し、データ処理の際も個人が特定できないようにした。また、本研究に協力頂くことで、ニューカマー既婚女性への仕事と家事や育児を両立する際の支援や、同様の問題を抱えている女性たちへの支援につながる示唆が得られること説明し、同意を得た。

### (4) 調査項目

1回目のインタビュー：基本属性等を中心に次の項目の調査を実施した。『出身国・出身地』『年齢』『学歴』『来日』『来日の理由』『結婚の経緯』『職業（来日前・現在）』『配偶者の出身国（国籍）・年齢、配偶者の職業』『日本語のレベル（本人・子ども）』『子どもへの期待』『近所との付き合い』『母語や文化の指導の有無』『子どもの英語教育』『子どもの将来等（高等教育・職業等）』『今後の課題や抱負』『悩みや問題点』『学校での問題点（本人・子ども）』『子どもを通しての社会への関わり』である。

調査対象者2名は就労目的による来日である。また、E1さんの配偶者は同国人、E2さんの配偶者は日本人である。

2回目のインタビュー：各個人の内在する価値観や感情を引き出すことにより焦点を当てた。

1. 来日時の仕事や日常生活の苦労や問題及びその苦労や問題の対処
2. 差別を受けたことがあるか、あればどんな差別か
3. 日本語教室の役割及び日本語教室との関わり
4. 日本語習得の過程
5. 日本語が不自由なために困ったことはあるか、いつ（時期）、どんな内容、困ったときの支援者

6. 結婚時に仕事と家庭の両立での苦労や問題及びその苦労や問題の対処
  7. 出産における苦労や問題及びその苦労や問題の対処
  8. 出産後に仕事と育児の両立での苦労や問題及びその苦労や問題への対処
  9. 子育ての苦労や問題及びその苦労や問題の対処
  10. 来日後仕事を始めた理由
  11. 仕事を始めた後、仕事と家庭の両立での苦労や問題
  12. 現在の仕事が本人にとってどういう意味をなすのか
  13. これまでの経験から、仕事と育児を両立する上で必要だと考える支援
  14. 定住しても問題ないと思うようになった時期
  15. 目標や将来の夢や構想
  16. 自分が現在どの社会にいるのか？老後はどこで生活するのか
  17. 目標達成に向けた知識や技術、スキルの習得
  18. どのようにネットワークを作り、リソースをどのように使用しているか
  19. 同国人のコミュニティはあるか
  20. 日系人のネットワークはあるか
- 3回目以降のインタビュー：2回のインタビュー調査の分析過程で、更に必要と思われる項目について追調査を実施した。

#### (5) 分析の方法

近田（2005）のモデルに基づき、調査対象者2名（E1さん：日系ニューカマー、E2さん：アジア出身ニューカマー）の語りから重要文脈を抽出し、近田（2005）のモデルに準拠した新たなモデルを作成し、そのモデルに基づき、4つのエンパワーメント（社会的・経済的・心理的・政治的）間の相互作用について明らかにした、また、「社会組織」とそれが形成する「社会ネットワーク」との関係についても分析した。

## 2. ニューカマー既婚女性のエンパワメントの事例

### (1) 日系ニューカマー既婚女性の事例

出身国	ペルー
年 齢	43歳
学 歴	中卒（日本では高校2年生にあたる）
来 日	1992年
来日の理由	テロと父親の自己破産
職業（来日前）	農業
職業（現在）	夫の会社の事務全般
夫の職業・年齢	会社社長・41歳
子どもの数	2人（長女：15歳、次女：8歳）
調査日	2016年8月27日、2017年3月18日、その他数回

#### 【在日ペルー人の概要】

1990年の「出入国管理及び難民認定法（入管法）」の改正後、就労に制限のないブラジル人等の南米日系人が製造現場などで単純労働者として働いているが、ペルー人の場合、1988年には864人だった外国人登録者数（島本2005）が2016年末には4万7740人（うち「永住者」は70%）となり、外国人登録者総数238万2822人の2%を占める（法務省）。製造工業が多い関東、中部、関西に集住しているが、日本全体はもとより集住地域を網羅するようなコミュニティを形成せず、小規模なカトリック教会の活動やサッカー、ダンスなど趣味のサークルに留まっている。また、自治体の外国籍住民対策においても、ブラジル人の数が圧倒的に多いことに加え、スペイン語とポルトガル語が類似していると考えられスペイン語が軽視される傾向が強く、ブラジル人の中に包括して扱われることが多い。したがってペルー人の集団としての印象は薄く、その生活ぶりはよく知られているとはいえない（島本2005）。また、日系南米人の日本での生活を考える場合、忘れてはならないのが「派遣会社」の存在である（加藤 2010）。

#### 【E1さんの語りから】

E1さんは10人きょうだいの次女。ペルー・リマ出身の日系ペルー人である。入管法改正後の1992年（18歳）に来日。来日して直ぐに南米日系人集住地域である神奈川県で働いた。

E1さん：「ビザは日系人だから困らなかった。」(政治的エンパワメント)

E1さんは日系ペルー人であるため就労に制限はなく、来日前に派遣会社の手配により来日し、労

働者として働くことができた。住居についても派遣会が全て斡旋してくれていた。E1さんの働く工場では多くのペルー人が働いていたので、来日してから日本語を話す機会は殆どなく、来日時はひらがなとカタカナのみで、会話は殆どわからなかった。何か問題があったときには派遣会社が対応してくれたので、特に問題はなかった。その後派遣労働者として雇用されている日系人は、2008年のリーマンショックの影響による不況で解雇され、帰国することを余儀なくされたものも多かった（駒井 2011）。E1さんは夫が2005年に起業したため、派遣切りから免れた。

来日前の1985年頃からペルーではテロ事件が頻繁に起こり、田舎の貧しい家庭では子どもをテロリストに預ける代わりに金銭を受け取ったり、また誘拐してきた子どもを強制的にテロリストにしたりする事件が起こっており、毎週テロ事件で、誰かが殺されていた。女性は特に危険だった。E1さんが中学生の頃自宅にテロリストが乱入してきたことが2度あったが、幸いなことに無線と薬を取られただけで、命までは奪われなかった。

また、当時父親が自己破産をしたため仕事がなく、家族全員畑で作ったものを食べ、何とかその日を凌ぐのが精一杯の生活だった。E1さんは家族のために日本で働いて仕送りすることしか生きてゆく術はなく、父親の勧めで来日することになった。

E1さん：「自分で働いて給料がもらえることが、本当に嬉しかった。たくさん貯金できるので。」

「恥ずかしいけど。1日16時間も働いたこともあった。全部ペルーにお金を送った。」

〔仕事〕(経済的エンパワーメント)

1カ月間休まずに働いたこともあったが、大変ではなかったという。それは、ペルーでの貧しい暮らしから抜け出し、働けば働くほど給料がもらえる。ペルーの家族に仕送りすることで、家族を養っているという強い思いが、心身の辛さを支えているように思えた。その後、既に来日していた日系ペルー人と結婚。

E1さん：「お金をためてペルーに家を建てたかったので、結婚してからすぐにペルーに自分の働いたお金で家を建てた。」

〔社会ネットワーク〕(社会的エンパワーメント)

『連帯感』(心理的エンパワーメント)

E1さんがペルーに自分の家を建てた理由は、ペルーでは貧しい家庭が多いので、将来はペルーで起業し、貧しい人たちを雇いたいと思ったからである。貧しい人が少しでも少なくなれば犯罪も軽減されると思った。その足がかりとしてまず家を建てた。それから暫くしてから第1子を妊娠したが、流産しそうになったので、仕事を辞めた。

野 口：「子育てはどうだった。」

E1さん：「子ども生んでから、二人だけで家にいると、大変だった。ストレスで頭がおかしくなりそうだった。」

一時的に子どもをペルーの両親に預けることで、そのストレスは解消した。

**[生存に費やす時間以外の余剰時間] (社会的エンパワーメント)**

長女が日本に戻ってから夫は毎日仕事で忙しく、子育てを手伝う暇もなかった。また周りに誰も支援してくれる日本人もいなかったのも、仕事との両立は大変だった。しかし、子どもの頃母親の代わりに幼い弟（0歳）や妹（3歳）の面倒をみていたので、おしめを代えたり、授乳したりすることはそれほど苦ではなかった。ただ子どもが病気のとき等、心配ごとは色々あったが、軽い病気でもすぐに小児科に連れていったので、何とか乗り切れた。夫も自分も健康だったことがよかった。[労働と生計を立てるための手段（健康）]

その後夫は起業した。夫が起業したのは、当時親会社の社長からの勧めであった。

**[仕事] (経済的エンパワーメント)**

起業で上手くいかなかったときには、当時停年退職する日本人の工場長のO氏が自分の退職金を当ててもいいという言葉が後押しとなり、起業する決断をした。

E1さん：「私達は本当運がいいし、健康だった。殆ど病気をしなかった。二人とも働きものだった。」

夫の起業の経緯から、夫は起業する能力があり、また日本人からも信頼できる人物であることがわかる。E1さんは夫と結婚したことは本当にラッキーだったといつも言う。E1さんは夫の仕事を手伝うようになったことで、日本語教室に参加するようになった。

**【外部者の支援】[社会組織][知識と技能][適正な情報][社会ネットワーク]**

**(社会的エンパワーメント)**

**【気づき】『信頼』『連帯感』(心理的エンパワーメント)**

E1さんは現在夫の会社の事務全般の業務を行っている。

**[仕事] (経済的エンパワーメント)**

**『自信』(心理的エンパワーメント)**

野 口：「どうして日本語教室に参加したの？」

E1さん：「仕事で日本語が必要だから。」

「最初はコンピュータも全然わからなかった。注文書とか。部品の名前が変わったり。

何回も嫌で嫌で辞めたかった。毎日泣いた。でも3年間結構頑張った。今は全部自分でできる。」

「私、ほんとうに努力したよ。人に自慢できるくらい。」

「仕事は自信。主婦だけだったら自信はない。」「仕事は自分にとって勉強になる。

仕事は続けたい。誇り。自信。ひとりになっても大丈夫。他の会社で仕事をしても大丈夫。」

当初は部品の管理や会計業務は全くわからず、また、パソコン教室に通ったが、パソコンで使用する言葉の意味が全くわからず、ストレスから辞めたいと思ったことが何度もあった。しかし日々努力を重ね事務全般の業務できるようになった。そのことが自信に繋がったとE1さんは話してくれた。

E1さん夫婦は2014年にA県に念願の家を建てた。

【防御可能な生活空間】(社会的エンパワーメント)(経済的エンパワーメント)

『愛着心』(心理的エンパワーメント)

以前はストレスでペルーに帰国したいと思ったことがあったが、今は経済的にも精神的にも困らない。子どもたちも大丈夫だし、子どもたちは日本にしか住めないし、日本にずっといるつもりだという。E1さんが建てたペルーの家はお兄さんが住んでいる。

E1さんの夫の会社には現在E1さん夫婦の兄弟や親戚の人たちが働いている。また、E1さんの両親を初め2人の兄以外は全員来日している。E1さんの夫が日本で起業したことで、かなりのペルー人の生活を支えているように見える。運転免許も取得し、子どもの送り迎え等もE1さん自身がしている。

【労働と生計を立てるための手段】(経済的エンパワーメント)

野 口：「ここにペルー人のコミュニティある？」

E1さん：「ない、ここは親戚だけ。神奈川県や愛知県の日系人はみんな知り合い。カトリック教会に行ってみると会う。」「ここはペルー人がたくさんいるので、土曜日、日曜日男だけ集まってサッカーする。日本人と他の外国人のチームがある。女は会社と同じだから。母の日、クリスマス、誕生日とか、みんなで集まるので楽しい。」

【社会ネットワーク】[適正な情報](社会的エンパワーメント)

『連帯感』(心理的エンパワーメント)

E1さんの夫が起業した当初は数人だったペルー人も少しずつ増えていき、現在では親戚を含めて40人程のペルー人が小さなコミュニティを形成している。E1さんと親戚のペルー人はカトリック教会での活動は行っていない。彼らはE1さんの夫の会社で働いていることで、親戚同士お互いに交流があり、支え合った生活をしている。E1さんはお正月やお盆休みには家族揃って東京に住んでいる両親のもとに会いに行ったり、旅行をしたりと余裕のある暮らしを送っている。

ニューカマー女性のエンパワメントと  
地域日本語教室の役割

E1さん：「私は毎日忙しい。日曜日、ある時間だけ、初級だけ。最初来たばかりの人に（日本語を）教える。ついでに日本語を教えながら（日本人に）スペイン語を教える。時間があるときだけ、教える。自分のためになると思って教える。（私は）あまりしゃべる人ではないので、これはチャンスかなと思った。」

[生存に費やす時間以外の余剰時間][社会ネットワーク](社会的エンパワメント)  
『連帯感』(心理的エンパワメント)

E1さんは最近、ペルー人の親戚の要望で、ボランティアで日本語を教えている。また、日本人にはスペイン語を教えている。今後はスペイン語を教える資格を取って、仕事以外でも自分の世界を作りたいと嬉しそうに話してくれた。

E1さん：「日本の生活は安心。安全だし、何でもしたいことができる。」  
「経済的。精神的にも困らない。子どもたちも。自分のやりたいこともできる。最初はストレスだったけど今はもう大丈夫。長い時間かかったね。」

日本でどんなに大変なことがあっても乗り越えられるのは、ペルーでの辛く苦しい生活だったが、家族の暖かさがあったからだという。ペルーと日本の生活を比べると、その苦労は大したことではないという。18歳までにペルーでどれほどの苦労をしていたのか計り知れない。

(2) アジア出身ニューカマー既婚女性の事例

出身国	ベトナム
年 齢	43歳
学 歴	高卒
来 日	1999年1月
来日の理由	仕事（技能実習生）
職業（来日前）	縫製工場
職業（現在）	司法通訳、専門学校の非常勤職員
夫の職業・年齢	無職・60歳
子どもの数	3人（長女：20歳、長男：14歳、次女（10歳）
調査日	2016年8月12日、2017年3月20日、その他数回

【E2さんの語りから】

E2さんは6人きょうだいの次女。ベトナム・ハノイ郊外出身。1999年来日。1999年に技能実習制度（旧制度）により3年間の期限付きで来日。3歳の時にベトナム戦争があった。自宅の庭に何カ所かの穴を作り、上から枝や草を掛けた。サイレンが鳴ると家族みんなその穴の中に隠れた。父親は戦争に行き、死亡の噂を聞いたので、遺体はなかったが葬式をした。当時それは普通のことだった。その後、父親は生き延びて帰還してきた。母も銃を持って自衛隊として戦争に参加した。

E2さんは学校の先生になるのが夢だったので、教育大学を受験したが2度失敗。3度目にやっと合格したが、そのときには既に縁談が進んでいたため大学に通わせてもらうことを条件に結婚した。しかし、現実とは違っていた。結婚後は夫の家族と同居した。夫は縫製会社を営んでおり、E2さんも仕事と家事をきちんとこなしていたが、大学には通わせてはもらえなかった。その後第1子を出産したが、家の中は暗く夫婦間や義父母との溝は深まり険悪になって行った。その状況にいたたまれずに3か月後には離婚し、家を出ることになったが、夫の要望で子どもは置いていかなければならなかった。とても辛かったがどうしようもなかった。離婚後実家に戻り家族と同居したが、町中に離婚の噂が広まり、居られなくなったために兄を頼ってハノイへ行き、兄の友人の工場で半年間働いた。

その後日本での技能実習生募集が目にとまり応募した。応募条件は縫製工場での経験が2年以上あることと高卒だった。経験年数が足りず応募条件を満たさなかったが、応募者が少なかったため実技試験で合格した。来日後技能実習生として縫製工場で3年間働いた。仕事があることがとても楽しく、工場では皆に可愛がられた。筆者がE2さんと出会ったのは、その頃である。当時縫製工場近くに在住の女性から技能実習生に日本語を教えて欲しい旨の依頼があった。それで、日本語教室のスタッフと二人で、週に1回ボランティアで日本語を教えることになった。

【外部者の支援】[社会組織][知識と技能][適正な情報][社会ネットワーク](社会的エンパワーメント)  
『信頼』『連帯感』(心理的エンパワーメント)

10人ぐらいの実習生が参加していたが、その中の一人がE2さんである。E2さんは他の技能実習生に比べて勉強熱心だった。

E2さん：「仕事があるのが毎日楽しい。すごく幸せのとき。特に1年目は楽しいことばかり。最初の職場（縫製工場）は本当によかったです。」

[仕事](経済的エンパワーメント)

E2さんは、来日半年後に現在の夫と出会い、任期の3年が終わってから結婚した。

[社会ネットワーク](社会的エンパワーメント)  
『連帯感』(心理的エンパワーメント)

翌年第2子を出産した。出産時の難しい看護師とのやり取りは夫に説明してもらった。夫とのやり取りは全て日本語。出産前に病院での沐浴の事前講習に参加した。



E2さん：「ベトナムでの出産は、何でも自分でしなければなりません。日本の病院は看護師さんが何でもやってくれるので、とても良かったです。」「ベトナムで長女を出産し、首が座るまで育児をしたので、それほど問題はありませんでした。」

食べたいものを夫が作れないので、出産して1週間後には自分で買い物に出かけた。当時、夫の仕事はギターの講師だったので、昼間は自宅にいて手伝ってくれた。しかし当時の住まいは国道から近かったので、車の騒音が激しく、あまり寝られなかった。

長男が1歳になったころにハローワークに出向き、スポーツ製品の会社で働いたが、運転免許を取得するために10ヶ月後に退職した。

【仕事】(経済的エンパワーメント)

【生存に費やす時間以外の余剰時間】(社会的エンパワーメント)

ある日夫が事故で骨折し入院したとき、長男は嘔吐下痢を発症した。そのとき長男は1歳だった。その日は雨と風が強かったが、車の免許を持っていなかったため自転車の後ろに長男を座らせ、傘をさして小児科に向かった。強い風と雨で傘が飛んでしまい、激しく泣く長男を宥めながら、自転車を押して何とか小児科に辿り着いた。しかし、その日は水曜日で休診だった。泣きたい気持ちを抑えながら、スーパーの駐輪所に自転車を止め、タクシーで別の小児科で受診した。外に出ると晴れていた。引っ越ししたばかりのアパートだったので、近所に知り合いもなく大変だった。

野 口：「どうして最初からタクシーを呼ばなかったの？」

E2さん：「私はすぐにタクシーを呼べないタイプ。日本に来てタクシーを呼んだのは2回しかない。人をお願いしない。自転車がだめだったら、歩きます。その日初めてタクシーを呼びました。」

野 口：「その頑張りはどこから来るの？」

E2さん：「もったいないと思う気持ちが先に立つ。」「ベトナムにいたときに苦労していたので、それが身についていると思います。ベトナムでは働きたくても働けなかったから。仕事がない。日本に来て仕事があるのが喜びです。」

運転免許を取得した後、ゴルフ場でキャディの仕事に就いた。

【労働と生計を立てるための手段】(経済的エンパワーメント)

【仕事】(経済的エンパワーメント)

E2さん：「キャディの仕事は雨が降ったり、暑い日や寒い日もあります。外国人だから大変ではなくて、日本人もみんな大変さは同じなので、一切文句を言ったことはないです。」「日本

人でも20代から60代の人も働いています。年配の人は自分よりもっと大変だと思います。その気持ちは今でも同じです。」

E2さん：「キャディの仕事は段々多くなりました。夫より自分の方が、給料が多かったんですが、夫は家賃と水光熱費と車のローンを支払って、自分は生活費のみを支払いました。」

時々日本人の同僚からきつい言葉を言われることもあったが、キャディの仕事を続けた。次女の出産6ヶ月前迄キャディとして働き、その後は縫製の仕上げの会社でアルバイトをした。しかし、2ヶ月に満たない頃に全身に湿疹ができ、痒くて火傷のような皮膚になった。顔以外の全身に湿疹が出た。6カ所の医院では治らなかったが、最後に受診した大学病院で完治した。しかし、今度は咳が酷くて入院した。妊娠8ヶ月の頃である。子どもを早く出産したかったので、医師に懇願したが、最終的には自然分娩で出産した。出産後2カ月ほどでキャディの仕事に復帰した。

次女出産時にはベトナムから姪を呼びよせていたが、日本語が全くわからなかったので、夫とのコミュニケーションが取れず大変だった。入院中に夫から姪との通訳のためによく電話が掛かってきた。姪は90日のビザで入国したが、延長して6ヶ月間滞在した。姪が来日した目的は二つあった。ひとつは子どもの面倒を見てもらうこと、もうひとつは日本で将来勉強できる可能性があるかどうかである。当時筆者にBさんから電話があった。姪のために外国人の日本語教育を行っている大学を探して欲しいという内容だった。色々調べ該当する大学を紹介した。

#### 【外部者の支援】[適正な情報] (社会的エンパワーメント)

このことがきっかけとなり、E2さんは日本語能力試験を受験しN2を取得、その後日本語教師養成講座を受講し、日本語教師の資格を取得したこのことが自分の進む道を決断する一助になったとインタビュー時に話してくれた。

#### 【気づき】(心理的エンパワーメント)

#### 【知識と技能】(社会的エンパワーメント)

野 口：「どうして日本人になったの？」

E2さん：「今ベトナムと日本は友好関係がよくなりますから、日本国籍でもいつかベトナムに帰っても難しいことではないですから、自分の将来と子どものために帰化をした方がいいと思いました。」

#### (政治的エンパワーメント)

帰化してからベトナムへの入出国がとても簡単になった。ベトナム人と日本の関係がよい日本を信頼しているからだと思った。帰化する前は荷物の検査等に時間が掛かり大変だった。子どもは、生まれたときに夫の希望で日本国籍を取得した。その理由は夫からベトナム人であつたら、就職するとき

ニューカマー女性のエンパワーメントと  
地域日本語教室の役割

に公務員になれないと言われたからである。

長男は発達障害と診断され、現在、中学校の特別支援クラスに通っている。細かいことはきちんとするが言葉があまり出てこない。早く気付いていたらよかったと思う。長男の記憶力は凄いと思う。家族の誕生日等も覚えていて、前はどこに行ったかも忘れていない。探し物も直ぐに見つけてくれる。高校に行って、専門学校に行かせて、物作りができるようになればいいと思っている。

その後、ベトナム語の会話ができる人の求人があり、教育センターのスタッフとなった。

**〔仕事〕(経済的エンパワーメント)**

しかし、当時はベトナム人の問題が多く、夕方から片道350kmもある他県まで午後8時過ぎに車で移動し、夜中に戻り、翌日午前8時半には出勤しなければならない生活だった。長男はまだ4歳だったので、あまりの忙しさに退職した。退職してからパソコン講座を受講した後、九州の駐在員としてベトナムから来日する留学生担当として非常勤職員の職に就いた。

**〔知識と技能〕(社会的エンパワーメント)**

**〔仕事〕(経済的エンパワーメント)**

その後、家を買った。

**〔防除可能な生活空間〕(社会的エンパワーメント)**

**『愛着心』(心理的エンパワーメント)**

E2さん：「私が教育センターで働いていたとき主人はデイサービス（老人ホーム）の仕事をしていたんですが、退職してもらいました。」

夫がデイサービスの仕事を退職してからは、家事や育児は全て夫に任せた。

E2さん：「初めて買ったパソコンで、インターネットで調べたら、通訳業の高収入の仕事がずらっと出てきました。こんな収入になるわけないでしょう、と思いました。で、覗いてみたら、法テラス通訳募集。10月頃の研修会に参加してくださいと手紙が来たので参加しました。自分の夢が眠ったままでしたが、だれか起してくれました。」

現在は専門学校の非常勤職員の仕事を続けながら、司法通訳の仕事に従事している。

**〔仕事〕(経済的エンパワーメント)**

**『自信』(心理的エンパワーメント)**

夫は結婚したころはギターのインストラクターをしていたがその後デイサービスの仕事に就いた。

E2さん：「自分は大学で勉強していないけど社会で色々勉強したと思っています。留学生は、私はどの大学を出たかと思っています。でも実際は技能実習生だったから。誇りに思います。」

E2さん：「ずっと上を目指したい。今日一日精一杯頑張ります。」

E2さんの今後の目標は、司法通訳の仕事をもっと極めたいことである

### 3. 考察

調査対象者の女性2名は、留学生とは異なり来日目的は就労のためである。また、欧米諸国ではなく、アジアや南米からの来日のため差別的扱いを受ける可能性もあり、エンパワメントしにくい状況にあると考えられる。そのような状況の彼女らがエンパワメントするにはどのような能力が開花されてきたのかを分析した。分析方法としては配偶者が同国人の場合と日本人の場合ではどのような共通点や違いがあるのかについて分析した。

分析を行うにあたっては、発達心理学や臨床心理学で有効な手段となるグラフを用いて行った。福田・古川（2006）は、人がいつ、どこで、誰とどのような体験を明らかにすることは、その個人の心理的発達において重要な要素となる。特に長期にわたる事象について、時系列的観点を導入することにより深く理解できる。しかし、インタビューを行う際、インタビュアーとのラポールが形成されていない場合には難しい。また、インタビュアーによる誘導、他者の存在によるネガティブなイベントを告白する際の抑圧が生じる可能性があるとして述べている（福田・古川2006）。

調査対象者と筆者は長期にわたる付き合いで、既に信頼関係を築いていたため、ネガティブな面についても深い心の内まで語ってくれた。このことからグラフを用いて時系列観点を導入することには、心理的側面を理解するのに有用な方法であると考えられる。

分析方法として、インタビューの結果をもとに調査対象者の入国から現在迄のイベントを時系列で記載し、筆者作成のモデル（図1）に基づきエンパワメントのプロセス（心理的・経済的・社会的・政治的）のグラフを作成した。

#### 〔グラフの説明〕

来日から現在までという時系列を横軸にとる。そして、中央にエンパワメント獲得の評価としてゼロの基準線を引き、上に行くに従ってエンパワメント獲得している状況である。その中央線より下に行くしたがってポジティブな状況。調査対象者からの語りからエンパワメント獲得に影響したイベントや問題になったイベントを記入する。

ニューカマー女性のエンパワーメントと  
地域日本語教室の役割

表1 E1さんのライフイベントとエンパワーメント8つの資源

言語の 操作能力	年	ライフイベント ★各資源にアクセスしたイベント	8つの資源にアクセス
↓	1992	★入国・派遣の仕事	[仕事]
	1997	★結婚	[社会ネットワーク]
	1997	ペルーに家建てる	
	2000	長女出産	
	2001	★長女をペルーの両親へ	[生存に費やす時間以外の余剰時間]
	2002	長女帰国	
	2005	★夫が起業・夫の会社の事務スタート	[仕事]
	2006	★日本語教室参加	[社会組織][知識と技術][適正な情報][社会ネットワーク]
	2007	★夫の会社の事務全般業務	[仕事]
	2008	★ペルー人コミュニティ形成	[社会ネットワーク][適正な情報]
	2008	次女出産	
	2013	家建てることを決意	
	2014	★家建てる	[防御可能な生活空間]
	2016	★運転免許取得	[労働と生計を立てるための手段]
	2017	★日系ペルー人に日本語を教える	[生存に費やす時間以外の余剰時間][社会ネットワーク]

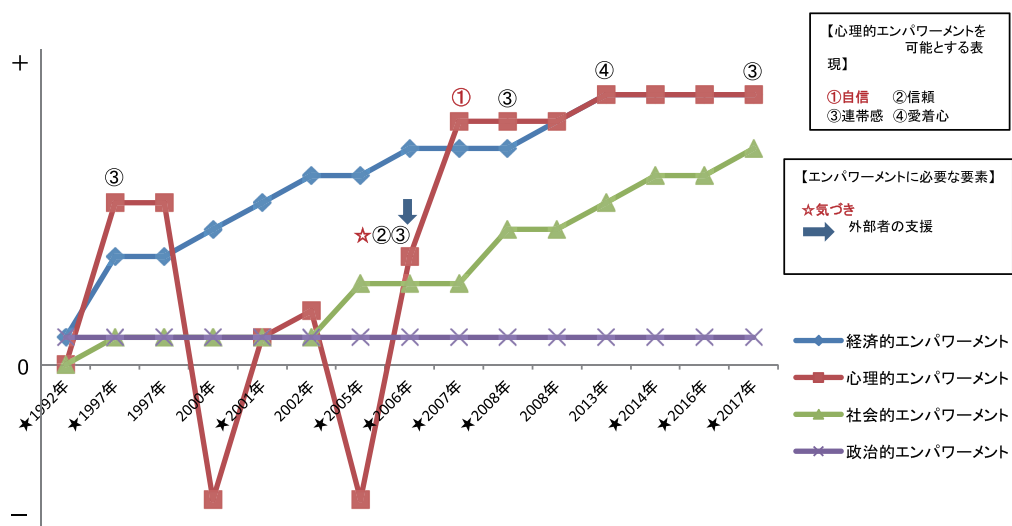



図2 E1さんのライフイベントとエンパワーメント獲得のプロセス

表2 E2さんのライフイベントとエンパワメント8つの資源

言語の 操作能力	年	ライフイベント ★各資源にアクセスしたイベント	8つの資源にアクセス
	1999	★来日(技能実習生:縫製工場)	[仕事]
	2000	★日本語教室参加	[社会組織][知識と技能][適正な情報][社会ネットワーク]
	2001	★結婚	[社会ネットワーク]
	2002	長男出産	
	2003	夫の入院・長男の病気	
	2003	★スポーツ製品の会社(工場)に勤務	[仕事]
	2003	★10ヶ月後に退職	[生存に費やす時間以外の時間]
	2004	★運転免許取得	[働と生計を立てるための手段]
	2004	★キャディの仕事開始	[仕事]
	2005	長男の発達障害判明)	
	2006	次女出産	
	2010	帰化する	
	2011	★日本語教師の資格取得・日本語能力試験N2取得	[適正な情報][知識と技能]
	2011	★教育センターの通訳の仕事開始	[仕事]
	2011	★コンピュータの講座受講	[知識と技能]
	2012	★司法通訳の仕事開始	[仕事]
	2012	★家进行てる	[防衛可能な生活空間[]]
	2014	長女(前の夫の子ども)来日	
	2017	司法通訳の仕事継続	

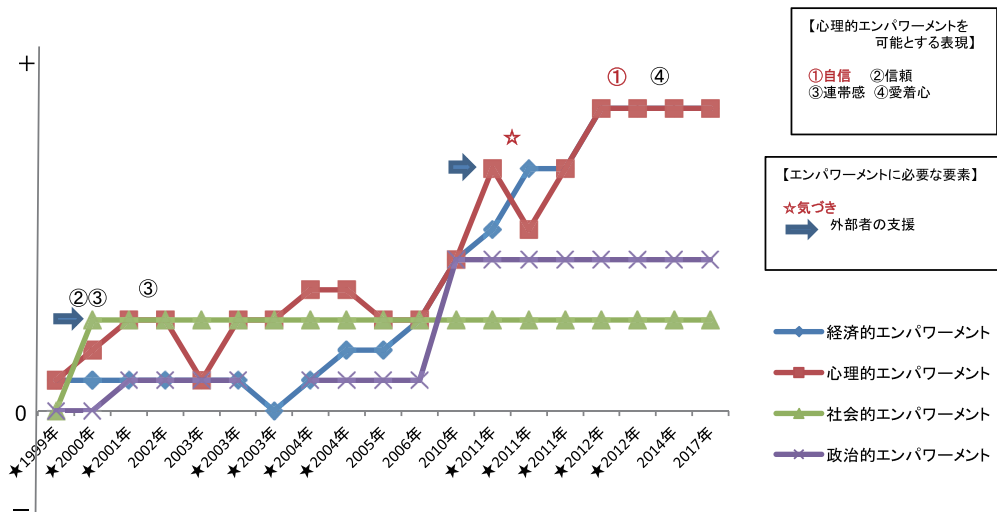


図3 E2さんのライフイベントとエンパワメント獲得のプロセス

二人に共通している点は、外部者主催（「外部者の支援」）の「社会組織（日本語教室等）」に参加し、日本語を習得（「知識と技術」）することにより心理的变化（『気づき』）が起こり、「仕事」に対して主体的意欲が高まり『自信』に繋がっている点である。つまり日本語を使う仕事により経済的エンパワーメントを獲得し、さらに心理的エンパワーメントを獲得している。E1さんについては出産後の育児や仕事において心理的にマイナス要因があるものの、母親の力を借りながら困難を乗り越えている。E2さんにおいても夫の入院、子どもの病気や障害や仕事において心理的なマイナス要因となっているが、「仕事」によって得た『自信』をバネに、切磋琢磨しながら困難を乗り越えている。二人に共通する点は、母国において辛い経験を重ねているが、その苦境が逆に力になっていることである。どんなに辛いことがあってもポジティブに考え、困難を乗り越える強い意思があることが明らかにされた。

夫が日本社会に適応する能力があることと、支援してくれる日本人の存在が大きい。つまり「外部者の支援」が必要不可欠であった。夫が外国人の場合、日本社会に適応できなくては、当然妻も長期に亘って日本で生活することは不可能である。E1さんの夫が起業するに至った経緯には一人の日本人の存在がある。そして事業が成功に至ったのは、E1さんの支えも大きい。そしてその会社に多くの親戚が働くようになり、日系ペルー人コミュニティができたことで、家族や親戚等の「社会ネットワーク」へと広がり『連帯感』が高まり、社会的エンパワーメントを獲得している。

妻の経済的エンパワーメント獲得にあたり、夫が妻に対する思いが徐々に変化している。E2さんの夫はE2さんよりかなり年上であり、考え方も保守的である。来日当初はE2さんがベトナム人であることが子どもの将来にとって、マイナスと考えていた。しかし、日本語を習得（「知識と技能」）し、家族を支えるだけの収入（「仕事（賃金）」）を得るようになるとE2さんへ敬意を払うようになったことが見出された。

### (3) まとめ

本研究はニューカマー既婚女性のエンパワーメントに関する研究であり、仕事と育児を両立してきた母親がエンパワーメントをどのように獲得してきたのか、そしてそのエンパワーメントにはどのような能力が必要なのかについて分析することであった。そのために現在子育て中の仕事と育児を両立しているニューカマー既婚女性が、来日してから仕事と育児を両立してきたこれまでの経緯についてインタビュー調査を実施した。その結果、それぞれ能力に特性があるなかで共通するものが抽出された。共通している点は、「ニューカマー既婚女性の〔ディス〕エンパワーメント・モデル」の8つの資源のアクセス数に差があるものの、概ねアクセスできていることが明らかになった。つまり仕事と育児が両立でき、社会的・経済的・心理的エンパワーメントを達成していることである。

そしてエンパワーメント獲得には、佐藤（2005）や近田（2005）が述べているように、当時者の「気づき」と「外部者の支援」が大きな役割を果たすことが明らかになった。まず、当時者の気づきにより外部者が運営する「社会組織（日本語教室等）」にアクセスする。アクセスすることにより日本語を習得（「知識や技能」）し、様々な情報（「適正な情報」）を入手することが可能になる。そして、さ

らに「社会ネットワーク」へと繋がっている。つまり社会的エンパワーメントを獲得している。また、交通の不便な地方都市では必要不可欠な運転免許「労働と生計を立てるための手段」も入手している。永住するという決意の証である自宅（「防御可能な生活空間」）も購入している。このことは経済的及び心理的エンパワーメント獲得に大きな要素であることが考えられる。また「生存に費やす時間以外の時間」では、資格取得等に時間を使い、現状に満足せずに、スキルを向上させるために努力してきたことが、[自信]に繋がっている。文化や習慣の違いで、辛い思いをしても、外国人だからとマイナス要因として捉えるのではなく、当然として受け止める気持ちがあり、前に進んでいる点も備わっている。

そして、得た自信は自己の存在価値の自覚に繋がっている。自己の存在価値を目指すためには他者との関係調整の中で自我を確立させることが必要不可欠であることから、周囲の人々との関係の中で調整を重ねてきたことが考えられる。なお、現時点では政治的エンパワーメントについては殆ど獲得されていないことが明らかになったが、今後、3つのエンパワーメントの総体として漸進的に得ることが考えられる。

また、本研究で明らかになった支援については、ニューカマー既婚女性の出産や出産後のサポートが重要であることであることがわかる。特に出産後の育児のための精神的なサポートは必要不可欠である。夫の出勤後の子どもと二人の生活は、言葉もわからず、頼る人にいない状況では、その精神的なストレスの大きさは測り知れない。日本語が全くできないときはもちろんのこと、日本語が少し話せるようになって、特に夫婦共に外国人の場合には、病院のシステムもわからず、どの病院にかかれればいいのか等、妊娠してから問題は始まる。

E1さんの場合、「精神的なサポートがあったら、国の両親に子どもを預ける必要もなかった。」E2さんの場合には、「国から姪を呼んだが、姪は日本語が全くわからず入院中のベッドから夫との間に入って通訳をしたが大変だった。」と。E1さんやE2さんの場合には、彼らが居住していた地域の「社会組織（日本語教室等）」にアクセスできていれば、何らかのサポートを受けることができていたかもしれない。

本研究は限られたニューカマー既婚女性を対象に実施したため一般化できるわけではないが、本調査の結果にもとづいて、今後益々増加傾向にあるニューカマー女性が仕事と家事や育児を両立するためにいくつかの示唆を提供していると考えられる。

#### 第4章 地域日本語教室の役割

地域日本語教室の役割はまず日本語学習の支援であるが、他に3つの役割がある。第一の役割は居場所の提供である。留学生は在籍校で生活面のオリエンテーションを受け、問題が生じた場合には相談できる。技能実習生等のように企業に属している場合も同様である。しかし、日本語の運用能力がなくどこにも属さない外国人の場合には、相談先の糸口すら見つけられず苦悩する。特に日本人を配偶者にもつニューカマー女性の場合には、言葉や文化や習慣もわからず、ましてや夫とのコミュニケーションが取れない場合には、事態は非常に深刻である。日本での生活のルールもわからず地域で



## ニューカマー女性のエンパワメントと 地域日本語教室の役割

孤立してしまう。また、同国人を配偶者にもつニューカマー女性の場合も同様である。夫とのコミュニケーションには問題ないが、夫婦共に言葉や文化や習慣がわからない場合には、夫以外の誰とも繋がることができず、地域で孤立してしまう可能性がある。地域日本語教室が、このようなニューカマー女性たちの心の拠り所となる居場所であることが必要である。そして、問題があったときには、いつでも気軽に相談できる場所であることが望ましい。

第二の役割は、情報の提供である。来日間もないニューカマー女性は、生活上のルールやスキル、地域のリソースやライフラインの利用についての知識がない。このような生活上に必要な情報を日本語学習の中に取り入れることで、少しずつ社会生活に適應できるようになる。

第三の役割は、様々なネットワーク形成の支援である。つまり、人と人とを繋げる役割である。日本語教室では同国や他国、さらに日本人スタッフたちとも交流ができる。同国の人たちと母国語で話すことができれば、同じ悩みを持つもの同士で気持ちが通じ合い、少しずつストレスから解放されていく。また、日本語教室には、年齢、人種、言葉や習慣、宗教、教育背景等、多様な背景を持つ外国人が参加しているため、学校、行政、企業等から様々な依頼があり、必要に応じて人と人を繋げることができる。このことは双方にとってとても有益なことである。しかし、人と人を繋げるためには、コーディネータ的役割の日本人の存在が必要不可欠である。

以上のように、地域日本語教室の役割は、日本語学習支援はもとより日本語の学習を通して外国人の居場所の提供、情報の提供、ネットワーク形成の支援であり、彼女たちの社会参加の第1歩となるような支援をすることである。

### <注>

- (1) 第二次世界大戦中に、日本の占領下で日本国民とされた在日韓国人・朝鮮人・台湾人の人たちが、敗戦後の1952年のサンフランシスコ平和条約で朝鮮半島・台湾などが日本の領土でなくなったことにより、日本国籍を離脱したもの（在日朝鮮人・韓国人・台湾人とその子孫について、日本への定住などを考慮したうえで、永住を許可したもの）。
- (2) 原則10年以上継続して日本に在留していて、必要要件を満たす外国人が対象となる(日本人と結婚している場合は3年で良いなどの特例あり)。
- (3) 開発途上国等には、経済発展・産業振興の担い手となる人材の育成を行うために、先進国の進んだ技能・技術・知識（以下「技能等」という。）を修得させようとするニーズがある。我が国では、このニーズに応えるため、諸外国の青壮年労働者を一定期間産業界に受け入れて、産業上の技能等を修得してもらう「外国人技能実習制度」という仕組みがある。この制度は、技能実習生へ技能等の移転を図り、その国の経済発展を担う人材育成を目的としたもので、我が国の国際協力・国際貢献の重要な一翼を担っている。最長3年の期間において、技能実習生が雇用関係の下、日本の産業・職業上の技能等の修得・習熟することを内容とする（JITCO）。なお、平成29年11月1日（公布：平成28年11月28日公布）に外国人の技能実習の適正な実施及び技能実習生の保護を図るための技能実習法が成立され、現行の3年間から5年間に延長さ

れた（国際研究協力機構）。

- (4) 法務大臣が特別な理由を考慮し一定の在留期間を指定して居住を認める者（日系人やその配偶者、「定住者」の実子、日本人や永住者の配偶者の実子（いわゆる連れ子）、日本人や永住者・「定住者」の6歳未満の養子、中国残留邦人やその親族などがある）（法務省）。
- (5) 在日コリアンを中心とする戦前から定住する外国人をオールドカマー（旧外国人）と呼ばれる（加藤 2010）。
- (6) オールドカマーと区別するために新たに来日し日本で生活する外国人をニューカマー（新来外国人）と呼ばれる（加藤2010）。

本研究は野口の修士論文をベースにしながら、主として地域日本語教室の役割について考察した論文である。児玉、野口による討論のもとで主として野口が執筆した。

#### [参考文献]

- ・明石純一他（2011）移民・ディアスポラ研究1 移住労働と世界的経済危機、pp37
- ・富岡宣之（1999）ひとの国際的移動—国際社会と日本—、嵯峨野出版、PP68-78,PP104
- ・田中弓子（2011）働く母親が子育てと仕事の両立の上で抱える苦悩、研究紀要、56-57, 283～298
- ・伊豫谷登士翁（2013）移動という経験 日本における「移民」研究の課題、有信堂、PP117-130
- ・多文化共生キーワード事典編集委員会編 田中泉（2011）多文化共生 キーワード辞典（2011） 移民と日本人
- ・大槻奈巳（2016）キャリア形成と女性のエンパワーメント
- ・太田まさこ（2011）問題解決型エンパワーメント・アプローチの効果と課題—インド、アンドラ・プラデシュ州、マヒラー・サマーキアーの事例をもとに— 看護学統合研究13(2),1-15
- ・ジョン・フリードマン（1995）斎藤千宏・雨森孝悦監訳、『市民・政府・NGO—「力の剥奪」からエンパワーメントへ』、新評論
- ・佐藤寛（2005）援助と援助におけるエンパワーメント概念の含意（佐藤寛編『援助とエンパワーメント—能力開発と社会環境変化の組み合わせ』アジア経済研究所）、PP8
- ・近田亮平（2005）「途上国の貧困削減を可能とするエンパワーメント—フリードマンの[ディス]エンパワーメント・モデルとサンパウロの都市貧困層のエンパワーメント」(佐藤寛編『援助とエンパワーメント—能力開発と社会環境変化の組み合わせ』、アジア経済研究所）、PP77-78
- ・島本篤エルナス（2005）「スペイン語系南米出身者」  
真田信治・庄司博史編「事典 日本の多言語社会」岩波書店、PP192
- ・加藤剛編（2010）ニューカマー外国人と日本社会 もっと知ろう！！ わたしたちの隣人 世『「ガラスのコップ」が壊れる時—国際金融危機と日系南米人の生活』界思想社 pp122-145
- ・移民・ディアスポラ研究1 移住労働と世界的経済危機（2011） 駒井淳監修 明石純一編者

## ニューカマー女性のエンパワーメントと 地域日本語教室の役割

- ・長谷部美香・王岩（2012）KFAW調査研究報告書Vol.2012-3「アジア地域における移行経済国から日本への女性の結婚移住 ― インドシナ難民家族と在日中国人家族における移民女性の事例から ―
- ・長谷部美香（2010）結婚移民に対する 移民ネットワークと移民コミュニティの役割 インドシナ難民の配偶者の事例から 社会学論考 第31号
- ・人の移動辞典 日本からアジアへ・アジアから日本へ ベトナム人のコミュニティと宗教 編者代表：吉原和男（2014）丸善出版 P 254-255
- ・研究代表者 澤宗則（2004）グローバリゼーション下のディアスポラ ―在日インド人のネットワークとコミュニティー 平成13年度～平成15年度 文部科学省科学研究費補助金（基盤研究(C)1)研究成果
- ・福田由紀・古川聡（2006）人生満足度曲線の妥当性に関する検討 ―ライフラインの観点からの分析 法政大学文学部紀要第54号

### 【統計資料】

- ・国際連合広報センター（2017年11月5日アクセス）  
[http://www.unic.or.jp/news\\_press/features\\_backgrounders/22174/](http://www.unic.or.jp/news_press/features_backgrounders/22174/)
- ・法務省、2016、「在留外国人統計」  
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001177523>（2017年5月28日アクセス）
- ・法務省：平成28年末現在における在留外国人数について（確定値）  
[http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04\\_00065.html](http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00065.html)  
（2017年5月28日アクセス）
- ・国際研修協力機構（JITCO）、外国人技能実習制度のあらまし（旧制度：2017年10月31日以前）  
[http://www.jitco.or.jp/system/seido\\_enkakuhaikai.html](http://www.jitco.or.jp/system/seido_enkakuhaikai.html)（2017年11月3日アクセス）

### 要旨

本研究は、地域日本語教室において学習するニューカマーのうち、主として既婚女性に注目してエンパワーメント獲得の過程とそこに関わる地域日本語教室の役割について考察する。はじめに外国人散在地域の地域日本語教室の支援活動について概要を述べる。続いて、地域日本語教室に来るニューカマー既婚女性のエンパワーメントにおける課題について述べる。さらに地域日本語教室に来ていたニューカマー既婚女性の中で、ふたつの事例に注目して来日後の育児と仕事を両立させたエンパワーメント獲得のプロセスと、そのプロセスにおいて遭遇するさまざまな困難とその困難に対処するなかでどのような能力が開花され、作り出されてきたのかをライフヒストリー調査をもとに分析する。最後に、散在地域の地域日本語教室の役割と課題について考察する。

JOURNAL OF  
THE FACULTY OF HUMANITIES  
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU  
(HUMAN RELATIONS)

Vol. 25

CONTENTS

Hiroko Noguchi

Empowerment of Newcomer Married Women and the Expected Roles  
of Local Japanese Language Classes . . . . . 69

---

Published  
by The Faculty of Humanities  
The University of Kitakyushu  
Kitakyushu, Japan  
March 2018